

ロンサールと「共生」(1) ——宗教対立をめぐって——

延味 能都*

序

16世紀後半のフランスは内乱の時代である。内乱の発端となる宗教対立の流れは、アンボワーズの陰謀(1560年3月)、さらにヴァッシーの虐殺から始まる第一次宗教戦争(1562年3月)と経るにしたがって、宗教対立という意味だけではなく、政治的な意味合いを帯びて行くことになる。この対立が一応の決着を見るのは、数度の宗教戦争を経て、1598年に発布されるナントの勅令を待たねばならない。半世紀にわたって続くこの内乱は、もちろん武人のみではなく、作家や詩人などの文人をも巻き込まずにはおこななかった。彼らは好むと好まざるとに関わらず自らの立場・信条を明らかにすることを余儀なくされ、この時代と関わりを持たずにはおられなかったのである。

ここで取り上げるロンサール P. de Ronsard もまた例外ではない。1524年に生まれ1584年に没する彼の生涯の後半は完全にこの宗教的、政治的対立の時代と重なっている。特に旧教徒として、旧教を擁護する宮廷の詩人として、さらには旧教の聖職録を持つ聖職者として、ヨーロッパ中にその名を知られた詩人として、この時代の流れと無縁に過ごすことはロンサールにはできなかった。

では、「共生」《symbiose》という視点を意識して現代から眺めた場合、ロンサールの主義主張の表れとしての作品はどう読めるのだろうか。本研究では、ロンサールと宗教対立との関わりを「共生」という視点からとらえる試みを行ってゆく予定である。本稿ではまず一編の詩篇「デ・ゾーテルへのエレジー」(1560) *Élégie à Guillaume Des Autels gentilhomme charrolois* から出発して、基本的な事柄をまとめることから始めたい¹。

1. 「デ・ゾーテルへのエレジー」

フランス詩と宗教戦争というテーマに関しては *La poésie française et les guerres de religion*² という優れた研究がある。さらにロンサールの原典批評版であるローモニエ版でもかなりの言及があ

* 岡山大学文学部助教授

¹ 本稿では紙面の制約により「デ・ゾーテルへのエレジー」に関連する考察にとどめる。続きはまた稿を改めて続ける予定であることをあらかじめお断りしておきたい。

² F. Charbonnier, Slatkine Reprints, 1970, édition princeps 1920.

り、ある意味で基本的な指摘はすでに行われているといってもいいだろう。だが、上記の研究は、一つは宗教戦争というコンテキストの中でのフランス詩全般に焦点をあてたものであり、もう一つはロンサール全集というコンテキストの中での宗教戦争への言及であり、ここで取り扱う「共生」という問題のためには今一度問題点を整理しておく必要がある。

まず、アンボワーズの陰謀というフランスを揺るがす大事件が起きたのは1560年3月のことであったが、この年の11月から12月にかけて、ロンサールは『第1次総合作品集』を発表している³。この作品集は4巻から成り、ロンサールが以前に発表した作品を集めて編纂されていたが、さらに新たな作品が加えられてもいた。そして、本稿で対象とする「デ・ゾーテルへのエレジー」はこの新たに加えられた詩編の中に含まれている。

ところで、このエレジーは第7次まである総合作品集以外にも、3回にわたって小冊子 *plaquette* の形でも発行されている。小冊子の形での発行は、1562年、1563年、1564年であり、1560年の『第1次総合作品集』と1567年の『第2次総合作品集』との間に挟まれる形で行われている。他方、この間に位置する1560年から1564年という時期は、宗教対立という点から見たフランスにおける激動の時期とちょうど重なりあう形になっている。この当時のフランスでは、まずアンボワーズの陰謀（1560年3月）から始まり、以下、ロモランタン王令（1560年5月）、フランソワ2世病死とシャルル9世即位（1560年12月）、オルレアン三部会（1560年12月～1561年1月）と重要事項が続く。1561年にはオルレアンの勅令（1561年1月）、7月勅令（1561年7月）、ポントワーズでの全国三部会（1561年8月）、ポワシーでの新旧両派の会談（1561年9月～10月）がある。翌年1562年には、1月王令またはサン・ジェルマン和平勅令（1562年1月）があり、ヴァッシーの虐殺から始まる第1次宗教戦争（1562年3月）があり、1563年にはフランソワ・ド・ギーズ暗殺（1563年）、アンボワーズ勅令と第1次宗教戦争終結（1563年3月）と続く。1564年にはシャルル9世の国内巡幸（1564年1月～）、トロワ協定（1564年4月）、ジャン・カルヴァン没（1564年5月）といった事項が並び、フランスは旧教と新教の対立を巡って激しく揺れ動き、そして小康状態に至る時期にあった。「デ・ゾーテルへのエレジー」が小冊子で発表された時期は、こうした激動の時期と重なっているのである。詩編としては常に同じ内容だったわけではなく、ロンサールによる加筆・修正が行われている。1560年の発表時と小冊子の形で発表された1562年～1564年とではタイトルも内容も異なっている。しかもこの3年間には明らかに反新教色が強

³ *Première édition collective des Œuvres de P. De Ronsard*. Le permis d'imprimer は8月6日、le privilège général は9月20日、第1巻の印刷日付は11月29日、第4巻の印刷日付は12月2日となっている。P. Laumonier, *Tableau chronologique des Œuvres de Ronsard*, deuxième édition, Burt Franklin, New York, 1969. ロンサールはこの『第1次総合作品集』以後、1567年に『第2次総合作品集』、1571年に『第3次総合作品集』、以下『第4次総合作品集』（1572-1573）、『第5次総合作品集』（1578）、『第6次総合作品集』（1584）と総合作品集を発表し続けることになる。ロンサールの死後になるが、1586-7年には『第7次総合作品集』が発表されている。

く打ち出されていた。

では、この「デ・ゾーテルへのエレジー」はどのように変化していったのか。1560年の最初の発表当時、この詩編のタイトルは *Élégie à Guillaume Des Autels gentilhomme charrolois* となっていた。デ・ゾーテルは1559年以来、したがってこの詩編の発表当時、すでに熱烈なギーズ派（旧教派）となっていたが、このタイトルでは単に「シャロロワの紳士ギョーム・デ・ゾーテルへのエレジー」というだけであり、デ・ゾーテルの宗教上の立場やこの詩の内容の点に関しては、このタイトルは何も示してはいない。だが、ロンサールのこのエレジーが、第1次宗教戦争の契機となったヴァッシーの虐殺（1562年3月1日）直後の1562年3月に最初に小冊子の形でおおやけになった時、この詩編のタイトルは1560年のタイトルとは異なるものになっていた。このエレジーのタイトルは *Élégie de P. De Ronsard Vandomois sur les troubles d'Amboise 1560, A Guillaume Des Autels gentilhomme charrolois* と変更されていた。もとのタイトルには無かった《les troubles d'Amboise 1560》の語が入ることによって、宗教的・政治的な何らかの立場を表明していることを示唆するタイトルとなっていたのである。そしてこのタイトルは同じく小冊子の形で発行された1563年、1564年にも使用されている。

ところが、1567年の『第2次総合作品集』では *Élégie à G. Des Autels, gentilhomme Charrollois* となってアンボワーズの陰謀に関する語句がタイトルから無くなった。1571年の『第3次総合作品集』、1572-1573年の『第4次総合作品集』でも同じタイトルが採用されている。その後の1578年の『第5次総合作品集』では *Discours à G. Des Autels, gentilhomme Charrollois* となり、1584年の『第6次総合作品集』では単に *Discours à G. Des Autels* となり、*Élégie* が *Discours* と変わってはいるが、1560年当時と同様な状態に戻ったタイトルがそのまま採用されていった。つまり1567年の時点で、タイトルとしては1560年とほぼ同じ状態に復帰したことになる。このようにしてみると、タイトルに関しては、宗教的・政治的傾向をうかがわせる語句は1562年から1564年のごく短い期間に限られており、しかも小冊子で発表された場合しか現れていないことがわかる。

一方、このエレジーの変化はタイトルだけに限ったことではなく、内容にも同様な変化が現れている。つまり、当初は対話重視路線であり、一時期だけ新教徒に対して武力行使を容認する記述が現れ、後にまた元に戻るという変化が認められるのである。特に導入部の部分で、ごく一部分の修正でありながら、詩編全体の意味が大きく変わる修正が行われることにより、詩編の内容の変化がもたらされている。このエレジーの変更はもちろんロンサールという詩人の一面を、そして当時の状況のごく一面を表すにすぎないが、旧教側のプロパガンダとして激動の最中に小冊子の形で発行されたことから、その当時のロンサールの「立場」を表す非常に重要な詩編となっている。

エレジーのタイトルの変遷はすでに述べた経過をたどるが、タイトルからは、アレクサンドラン（12音綴詩句）244行で構成されているこの詩編の内容の詳細を窺うことはできない。1560年

の発表時の内容の概略は以下のようなものである。

まず v. 1-8 ではこの「デ・ゾーテルへのエレジー」の献呈先であるデ・ゾーテル賛辞が行われている。デ・ゾーテルは法律家でもあり、1559年に *Remonstrance au peuple François* を発表している。その中でロンサールに *Eloge de la Paix dédié à Ronsard* を捧げており、このエレジーは、その詩編に報いるためのものでもあったのである⁴。この後に続く v. 9-24 では反乱派（ユグノー）へどのように対処するかが語られている。v. 25-32 では反乱側が強く、カトリック側が押され気味であることを嘆き、v. 33-40 ではデ・ゾーテルやロンサールがいかに旧教と母国のために文章で戦ったかを語り、v. 41-48 では神話を引き合いに出して、カトリックと改革派の両方が過ちを犯しているとする。v. 49-76 ではユグノーが王権に対する反乱者であること、旧来の宗教を尊重しないこと、自分たちだけが正しいと考えていること、など他にもユグノーの誤りをあげて非難している。一方で、v. 77-112 では教会（旧教）側にも問題があることを認め、さまざまな状況を列挙し、悪弊を絶つ必要を説いている。v. 113-116 ではルター派の主義主張は悪いがうまくそれを主張していること、逆に旧教の主義主張は良いがその主張に失敗していることを嘆いている。v. 117-126 では過去の平穩を羨み、v. 127-156 ではフランスの惨状を嘆き、v. 157-170 ではフランスの問題点の列挙が続く。v. 171-210 では予言を引き合いに出して現状を嘆く。そして終盤には v. 211-234 でギーズ兄弟の功績を列挙し、最後の v. 235-244 ではギーズ家繁栄の祈願と反乱派への呪詛で終わっている。

この1560年のテキストには武力行使よりも対話を優先させる穏健な態度と共に、カトリックの強硬派と通じる部分が少なからず含まれている。後で見ると1560年のテキストでは武力闘争を積極的には主張しない一方で、ギーズ礼賛の色が濃く出ているのである。タイトルに「アンボワーズの騒乱」の言葉が現れる前の1560年の最初のテキストの段階でも、その内容はすでに政治的・宗教的な「立場」に関わるものなのであった。

先に言及したように、この詩編は1560年以降も小冊子の形で、あるいは総合作品集に収録され、最後まで残り続ける。そしてロンサールが常にそうしたように、この詩編も修正を受けることになる。修正するという行為はロンサールにとっては特別なことではなく、この詩編が特別な扱いを受けたというわけではない。しかしこの詩編は、たとえば1552年の『恋愛詩集』*Les Amours* に含まれるソネに見られるような、細かく多岐にわたる修正を受けたというわけではない。主な変更部分は、v. 1-40までの最初の部分と v. 200-236までの部分に限られている。特に v. 9-v. 22

⁴ このエレジーの献辞はデ・ゾーテルに宛てられている。しかし、その内容は実はデ・ゾーテルに宛てられている部分は少ない。デ・ゾーテルはロンサールの *Les isles fortunées* (1553) や *Élégie à J. De La Peruse* (1553) にすでに仲間として名前が挙がっている古くからの知り合いである。1555年の *Hymne du treschrestien roy de France Henry II. De ce nom* では名前がベルチエに置き換わっているが、他にもいくつかの詩編の献呈をうけている。デ・ゾーテルは1560年にさらに *Harangue au peuple françois contre la rebellion* も発表している。

に関して行われた変更は単なる修正としてすますにはあまりに大きな変更であった。これらの行の意味だけではなく詩全体の新教徒へ対するスタンスが正反対になるような変更であったからだ。

まず、1560年の『第1次総合作品集』に発表された当時、テキストは以下のようなものであった。

Ce n'est pas aujourd'huy que les Rois & les Princes
Ont besoing de garder par armes leurs provinces,
Il ne faut acheter ny canons, ny harnois,
Mais il fault les garder seulement par la voix,
Qui pourra dextrement de la tourbe mutine
Appaiser le courage & flatter la poitrine :
Car il fault desormais deffendre noz maisons,
Non par le fer trenchant mais par vives raisons,
Et courageusement noz ennemis abbatre
Par les mesmes bastons dont ils nous veullent battre.
Ainsi que l'ennemy par livres a seduict
Le peuple devoyé qui faucement le suit,
Il fault en disputant par livres le confondre,
Par livres l'assaillir, par livres luy respondre, ... (Lm.10, p.349-350, v.9-22.)

ここに認められるロンサールは積極的に新教徒を排斥する考えを述べているわけではない。少なくともこのテキストを見る限りでは、ロンサールはユグノーに対して武力の行使を声高に主張する好戦的な態度をとっているわけではない。はっきりとギーズ派側に身を置いていたデ・ゾーテルと比べ、当時の状況を考えてみれば、ロンサールはむしろ穏健派に属していた。ここで主張されているのは武力闘争ではなくむしろ文書（プロパガンダ）による戦いなのである。

しかし1562年に小冊子の形で発表された時、タイトルに《sur les troubles d'Amboise 1560》の言葉が入った。その時には内容は以下のように（下線部参照）修正されていた。

C'est donques aujourd'huy que les Rois & les Princes
Ont besoing de garder par armes leurs provinces,
Et contre leurs sujets opposer le harnois,
Usant & de la force & de la douce voix,

Qui pourra dextrement de la tourbe mutine
Appaiser le courage & flatter la poitrine :
Car il fault desormais deffendre nos maisons,
Et par le fer trenchant, et par vives raisons,
Et courageusement nos ennemis abbatre
Par les mesmes bastons dont ils nous veullent battre.
Ainsi que l'ennemy par livres a seduict
Le peuple devoyé qui faucement le suit,
Il fault en disputant par livres le confondre,
Par armes l'assaillir, par armes luy respondre, ... (Lm.10, p.349–350, v.9–22, variantes 1562.)

引用 1 行目の《Ce n'est pas aujourd'huy》が《C'est donques aujourd'huy》となることにより、「王侯は武器によって国を護らねばならぬ時は今」となり、武器を取っての戦いを主張するものとなった。さらに引用 3 – 4 行目が《contre leurs sujets opposer le harnois, / Usant & de la force & de la douce voix》となることによって、対話による対応の余地を残してはいるものの、武力の使用が明示的に肯定された。引用 8 行目では《Non par le fer trenchant mais par vives raisons》から《Et par le fer trenchant, et par vives raisons》へと変更された。この変更によって、この詩句は武器の使用を否定して言い分を主張するという、対話を強く勧める1560年の詩句から、対話による対応を認めつつなお剣（武器）の使用も認める詩句へと変貌した。引用最後の行では1560年の《Par livres l'assaillir, par livres luy respondre》が《Par armes l'assaillir, par armes luy respondre》となり、武力闘争容認の方向へと大幅に方向転換が行われた。テキストとしては、この1562年の小冊子のものが1564年の小冊子まで使用されており、この3年間の間のテキストがそれ以前とは180°近く異なる方向を向いていることがわかる。

その後、1567年の『第2次総合作品集』に収録された時点で、すでに述べたように、タイトルからアンボワーズの陰謀への言及が消え、まずタイトルの方が先に旧に復帰した。しかし内容の方は、『第2次総合作品集』でも『第3次総合作品集』でも、さらには1572–1573年の『第4次総合作品集』でも1562年の小冊子の状態を保ちつづけた。この内容がもう一度修正を受けて、タイトルに追隨するかのように内容の過激さも無くなるのは1578年の『第5次総合作品集』でのことになる。

1578年の版では以下のように変更が行われる。

C'est donques aujourd'huy que les Rois & les Princes
N'ont besoing de garder par armes leurs provinces,

Et contre leurs sujets opposer le harnois,
Mais il faut les garder par livres & par vois,
Instrumens qui pourront de la tourbe mutine
Appaiser le courage & flatter la poitrine :
Car il fault desormais deffendre nos maisons,
Non par le fer trenchant ains par vives raisons,
Et courageusement nos ennemis abbatre
Par les mesmes bastons dont ils nous veullent battre.
Ainsi que l'ennemy par livres a seduict
Le peuple devoyé qui faucement le suit,
Il fault en disputant par livres le confondre,
Par scavoir l'assaillir, par scavoir luy respondre, ... (Lm.10, p.349–350, v.9–22, variantes 1578.)

1562年に《C'est donques aujourd'huy》と変更された部分はそのままだが、その後の部分で《N'ont besoing de》と否定が入ることによって、1560年と内容的には同じになっている。《Usant & de la force》も無くなり、代わりに《il faut les garder par livres》が入った。《Et par le fer trenchant》は《Non par le fer trenchant》と1560年の言葉に戻された。《Par armes l'assaillir, par armes luy respondre》は《Par scavoir l'assaillir, par scavoir luy respondre》となった。エレジーの8行目から22行目にかけては、こまかな文面は変わったが趣旨としては武力闘争よりも対話を優先させる1560年の段階の対話路線を指向する表現にもどったのである。

このようにしてみると、このエレジーが一種過激な様相を帯びたのは、タイトルでは1562年から1564年までである。しかし内容的には1562年から1573年公表分までが過激な内容になっている。タイトルはわずか3年程度のごく短い期間のことではない。内容の方は1578年の『第5次総合作品集』を待たねばならないので約16年の期間にわたるが、最終的にはタイトル、内容共にもとの1560年の穏健な形が復活したことになる。そしてロンサールがこのエレジーで見せた動きは、ローモニエによれば、《Ce qui est curieux encore – et probant – c'est qu'à partir de 1578 le texte est revenu au premier esprit de la pièce et qu'on n'y trouve plus les variantes belliqueuses et guisardes de 1562.》⁵ということになるのだ。

2. 1560年

1560年のテキストに現れているロンサールの態度は繰り返し述べたように穏健なものである。

⁵ Lm10, p.350, note2.

それは折り合いさえつけば両者の共存が可能と考えているようにもとれる。「デ・ゾーテルへのエレジー」の最初のテキストは、アンボワーズの事件の少し前に、つまり1560年の3月より前に書かれた可能性が高いとされている⁶。この頃、1560年の3月にはコンデ公（ユグノー派）によるアンボワーズの陰謀があり、この騒動の中で大きな役割を果たしたフランソワ・ド・ギーズの行動と共に、新旧両派の対立を深刻化させる方向に状況は働いた。しかしその一方で、同年5月には宰相に任命されていたミシェル・ド・ロピタルによってロモランタン王令が發布され⁷、新教・旧教両派の融和を計るための努力がなされてもいた。こうした状況の中で示された穏健性は、はたして「共生」と関わってくるのだろうか。

まず、この武力闘争の否定（あるいはプロバガンダによる非暴力的闘争）というスタンスが、すぐさま新教徒との共生もしくは共存を指向する考え方の現れととらえられるわけではない。この1560年のテキストの穏健さはロンサルの置かれた立場、あるいはロンサルが自ら選んだ立場と不可分に結びついている。そしてロンサルの「立場」に対して強い影響を及ぼした二人の人物がいる。

1559年4月にカトー・カンブレジスの和約が成り、フランスはイタリア諸都市への権益放棄を認めることとなった。しかし、一方では8年間に50万エキュを支払うことを条件に、フランソワ・ド・ギーズが奪回に成功したカレーのフランスへの帰属を認めさせることができた。この和約によりイタリア戦役が事実上終了し、アンリ2世は国内の宗教対立の問題に着手出来るようになるはずだった。しかし、そのアンリ2世は6月末に妹マルグリット・ド・フランスとサヴォワ公との婚礼祝賀行事の馬上槍試合で頭部へ重傷を負い、その負傷がもとで7月に死亡してしまう。この当時のフランス宰相はオリヴィエ François Olivier であった。しかしこのオリヴィエも翌年の3月にアンボワーズの陰謀が発覚した騒動のさなかに73歳で他界してしまう。その結果、すでに微妙な状態に入っていた宗教問題の取り扱いはまだ15歳のフランソワ2世とカトリーヌ・ド・メディシスの手にゆだねられることになってしまった。ギーズの権力の増大への対処と、まだ盤石ではない王室のために、ここで次期宰相として呼び出されたのがミシェル・ド・ロピタルであった。

ミシェル・ド・ロピタルはもともと王妹マルグリット・ド・フランスに仕えていたが、ロンサルはこのマルグリットから支援を受けていたという関係があったのである。ロピタルは1549年にマルグリットの所領であるベリー公領の宰相になっているが、ロピタルがベリー公領宰相を務めている時代、ブルジェの宮廷にはロンサルも出入りしていたし、さらにはパリのジャ

⁶ Lm10, p.351, note 2 : «Il est donc très probable que cette Elégie fut écrite un peu avant les événements d'Amboise (où les troupes royales se heurtèrent à celles des huguenots les armes à la main) ...»

⁷ ロモランタン王令：異端にかかわる審理を司教の管轄に置き、これによって宗教犯と刑事犯とを分離しようとした。一方では、高位聖職者がその責任教区に居住する義務を規定した。

ン・ド・モレルの文学サロンにも二人は出入りしている。ロンサールが王の面前でメラン・ド・サンジュレに嘲笑された出来事は1550年の5月か6月頃とされるが、その際に彼の名誉回復に動いた一人がロピタルであった。具体的にはその年の7月に *Elegia* を書いてロンサールの擁護に努めている⁸。その礼ともいえるのが『オード集第5の書』に収められた「ミシェル・ド・ロピタルへのオード」である。したがって、ロピタルはマルグリットと共にロンサールにとってやはり恩ある支援者の一人だったのである。

ロピタルは1560年4月に宰相オリヴィエの後任としてフランス宰相となったが、1560年ころには、王室はまだ寛容政策を主眼に置いて動いていた。その彼の最初の大きな仕事となったのがロモランタンの王令である。この勅令は宗教犯と刑事犯を分離するものであり、新教を信じることだけでは犯罪者とはならなくなるのである⁹。前宰相のオリヴィエはギーズ家の政策に好意的な立場をとっており、アンボワーズの陰謀では新教徒を激しく非難していたが、ロピタルは宮廷内にあつて、積極的に寛容政策を推し進めようとした人物である。

一方、アンボワーズの陰謀で重要な役割を果たしたギーズ公フランソワは熱狂的な旧教主義者である。ギーズ派は宮廷内でも強力な力を持っていたが、フランソワの弟シャルルはロレーヌ枢機卿としてやはり旧教擁護の巨物として宮廷で大きな影響力を持っていた。そして、このロレーヌ枢機卿シャルルもまたロンサールの支援者なのであった。ロンサールは異なる立場に身を置き、主義主張も異なるロピタルとロレーヌ枢機卿を、両者とも支援者としていたのであった。

このロピタルとロレーヌ枢機卿の間は後年は修復不可能なまでに決裂してしまうが、この当時はそれほど悪化しているわけではなかった。ロピタルの残した書簡の中にはロレーヌ枢機卿宛の書簡も少なからずのこされており、それによればロレーヌ枢機卿と宰相ロピタルという二人の間はまだ決裂してはおらず、むしろ良好な関係にあった¹⁰。ギーズ公の弟であるロレーヌ枢機卿へロンサールを推薦する推薦文 *Commendatorix*¹¹もロピタルは書いており、「ロレーヌ枢機卿シャルルの讃歌」*Hymne de Charles Cardinal de Lorraine* がこの推薦文と共に1559年に発表されているのである。

しかし、この「ロレーヌ枢機卿シャルルの讃歌」から、ロンサールにはロレーヌ枢機卿側へ傾き始めた兆候が見える。「デ・ゾートルへのエレジー」の最初のテキストは、アンボワーズの事件の少し前に書かれたとされているが¹²、このエレジーの最終部分にはギーズ称賛の一節があ

⁸ *Elegia* はローモニエ版には掲載されていない。Blanchemain 版ロンサール全集第4巻を参照。

⁹ 矢田部厚彦、『宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯』、p.107、読売新聞社、1975。

¹⁰ Maurice Lange, *Quelques sources probables des Discours de Ronsard*, p.792, *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 1913. «On n'y trouve pas moins de quinze éfitres – quatorze au cardinal de Lorraine, et une au duc de Guise après Saint-Quentin (1557) – où s'expriment son amitié et son admiration pour les princes lorrains.»

¹¹ *Commendatrix* はローモニエ版には掲載されていない。Blanchemain 版ロンサール全集第5巻を参照。

¹² 注9を参照。

る¹³。さらに、同じ年の1560年の後半には「マズールへのエレジー」*Elégie à Louis Des Masures Tournisien* が書かれている¹⁴。このマズールがロレーヌ枢機卿の秘書官であることを考えると、ロンサールは1560年の時点でロピタル側と言うよりも、むしろギーズ派に接近しているように見える。

だが、1560年頃の段階では、ロンサールはロピタルと完全に切れるにはまだ至っていない。「デ・ゾーテルへのエレジー」の最初のテキストの部分については1560年の7月の高等法院でのロピタルの演説と似た部分があることが指摘されており¹⁵、ロピタルの寛容主義の影響も指摘されているからである¹⁶。さらに、ロンサールはエレジーをギーズ礼賛で終わっているが、そこで使用された言葉はロピタルの詩から（ロピタルの意図は別として）採られた可能性があることも指摘されている¹⁷。エレジーの中に見られるユグノー批判に関しても、批判自体は支援者たるロピタルの考えと矛盾するわけではない。ロピタルは1560年当時、公平にユグノーの誠実さを認めてはいたものの、一方では宗教を単なる口実として利用する暴徒がいることを繰り返し述べていたのである¹⁸。この当時のロンサールは思想の面でもロピタルと近いものを持っていた。

先にあげた「マズールへのエレジー」はアンボワーズの陰謀より後に書かれたと推定されているが¹⁹、1562年の「デ・ゾーテルへのエレジー」のテキストと比較して、この1560年後半の頃のロンサールがまだユグノーに対して過激な態度をとってはいなかったことを示すとされている²⁰。この「マズールへのエレジー」と1560年の「デ・ゾーテルへのエレジー」のテキストは

¹³ Lm10, p.361–362, v.227–238. «O Seigneur tout puissant! Pour loyer des bienfaits / Que ces Princes Lorreins au besoing nous ont faits, / Et si mes humbles voeux trouvent devant ta face / Quelque peu de credit, je te supply de grace, / Que ces deux Guysians, qui pour l'amour de toy / Ont ramassé l'honneur de nostre antique foy, / Fleurissent à jamais en faveur vers le Prince, / Et que jamais le bec des peuples ne les pince. / Donne que les enfans des enfans yssus d'eux / Soyent aussi bons Chrestiens, & aussi vaillans qu'eux, / Plus grands que nulle envye : & qu'en paix eternelle / Il pouissent habiter leur maison paternelle.»

¹⁴ Lm10, p.363, note 1.

¹⁵ Maurice Lange, *Quelques sources probables des Discours de Ronsard*, p.792, RHLF, 1913.

¹⁶ Maurice Lange, *ibid*, p.792. «Ne serait-ce point une pensée de L'Hôpital qui a inspiré à Ronsard les premiers vers de son *Discours à Des Autels*? Quand Ronsard reconnaît que ce n'est plus «par armes», mais «par livres et par lois» que désormais les rois doivent garder leurs provinces : ». 引用文中のタイトル *Discours à Guillaume Des Autels* は1584年以後のものである。1560年当時のタイトルとしては *Elégie à Guillaume Des Autels gentilhomme charrolois* が正しい。Lange は1584年のテキストでロピタルの影響を問題にしているが、これは時期的に難点がある。ロピタルは1573年にすでに他界しているからである。むしろこの指摘はロンサールとロピタルの関係がまだ続いていた1560年当時の状況としてとらえるべきであろう。

¹⁷ Maurice Lange, *ibid*, p.793. 「デ・ゾーテルへのエレジー」の v.212–220の部分である。

¹⁸ Maurice Lange, *ibid*, p.802.

¹⁹ 注18を参照。

²⁰ Charbonnier, *La poésie française et les guerres de religion*, p.35–36. «Le *Discours à Louys des Masures* apparaît comme le premier en date dans cette fameuse guerre de pamphlets ; il fut écrit avant l'*Elégie à G. Des Autels* ; le réquisitoire de Ronsard contre les protestants est loin d'avoir la précision qu'il prendra dans cette dernière pièce. Ce n'est guère qu'une digression, vers le milieu du morceau : » ここで名前の挙がっている *Elégie à G. Des Autels*

確かに武力闘争よりもプロパガンダによる闘争を指向し、平和的解決の余地を残している。ロンサールは寛容政策推進派の支援者はもちろん、新教に改宗した友人とも依然として付き合いを続けていた。さらにロンサールはこの頃、意外にも比較的幸運な日々を送っていた。1560年6月16日、ロンサールは Château-du-Loir の副司祭 archidiacre に任命されていたし、Saint-Julien du Mans の司教座聖堂参事会員の聖職録を手に入れようとしていた。これはすでに手に入れていた Evailé と Champfleur au Maine の司祭聖職録に新たに加わるものになるはずであった²¹。さらに古くから支援者であったロピタルが宰相および国璽尚書に就任していたので、もう一段上の大修道院司教職の聖職録への期待が持てたのである²²。つまり、このような宰相としての寛容政策を進めるロピタルとは利益という点でも決定的に切れるわけにはいかなかった。だが、カトリック陣営にいる支援者も、彼にとって重要であることは変わりなかった。

立場の異なる二人から支援を受ける側のロンサールとしてはすでに微妙な立場に立っていた。ロンサールとしては旧教擁護か新教擁護かに偏ることによって、どちらか一方の支援者の機嫌をわざわざ損ねる必要はなかった。ロンサールにとってはそれは避けるべきことだったのである。そしてエレジーは明らかにギーズ寄りの内容でありながらも、そこに見られる穏健な態度は、当時の宮廷の意向と、その中心にいるもうひとりの支援者であるロピタルへの配慮と無関係ではない。

ロンサール自身もそれほど切羽詰まった状況に置かれているわけではなかった。1560年にアンボワーズの陰謀が明らかになった段階で、教会はこうしたプロパガンダ闘争の必要性に気がつく²³。このエレジーには時期的な理由に加え、旧教のプロパガンダとして使用できる「内容」があったのである。その結果、この詩編は旧側から新教側に対するプロパガンダの一環として位置づけられた。しかしロンサールは、新教徒に対して不満を持ちながらも、新教と旧教の両方の陣営に友人や支援者を持ち続けることができた状況からも窺えるように、さらにはエレジーの中で教会の問題点に目を向けていることから窺えるように、まだ余裕のある状態だったのである。ロンサールとしては、新教徒は依然として「説得を試みることのできる相手」の範疇にあり、まだ平和的な手段で事態は収拾に向かうと考えていたようである。

エレジーの1560年版に見られる穏健な態度には以上のような「事情」も絡んでいる。したがって、「共生」という概念が「異質な相手の存在を認め共存の工夫をこらす」という方向を指向するものであるならば、ロンサールの当初の態度は「共生」といった概念と必ずしも結びつくわけではない。

は1562年の発表のものを指している（引用者）。

²¹ Lm10, XVIII-XIX.

²² Ibid.

²³ Charbonnier, *La poésie française et les guerres de religion*, p.37.

3. 1560年末～1562年

アンボワーズの陰謀の後、ギーズ派の反対にもかかわらずオルレアンに全国三部会（1560年12月13日～1561年1月31日）の招集が決定される。フォンテーヌ・ブローの貴顕会議では穏健派が大勢を占めたのである。そしてその三部会の最中に、1560年12月アンリ2世の後を継いだフランソワ2世が16歳で病死し、今度は10歳のシャルル9世が即位してカトリーヌ・ド・メディシスは摂政となった。年末にはカトリーヌの融和政策のためか、逮捕されていたコンデ公の死刑は無期延期される。1560年12月13日の三部会の開会演説でロピタルは教会改革の必要性に触れている²⁴。この教会改革の必要性は1560年の時点ですでにロンサールのエレジーの中にも出ており、ここでも1560年当時のロンサールの考え方がロピタルの考え方に近いことをうかがい知ることができる。

翌年の1561年2月にはオルレアンの寛容王令が發布され²⁵、つまり新教側に有利な方向へと情勢は動いた。この1561年の後半にはロンサールは *Institution pour l'adolescence du Roy treschrestien Charles neufieme de ce nom* を書くが²⁶、内容はそれほど緊張しておらず、戦闘的でもない。もともとこの詩はロピタルがフランソワ2世に宛てた書簡詩の引き写しにすぎない²⁷。ロンサールとロピタルの関係はまだ続いており、まだヴァッシーの虐殺は起きていない。そして、寛容政策の継続している間には、まだエレジーの内容は変わらない。

1561年の4月に入ると、アンヌ・ド・モンモランシー、フランソワ・ド・ギーズ、サン・タンドレ元帥が宮廷の実権をにぎり、いわゆる三頭政治が始まるとともに旧教派の巻き返しが始まった。1561年7月には、7月勅令によって新教の礼拝が禁止される。1561年8月には全国三部会が招集される。そして1561年9月～10月にかけて、ボワシーにおける新旧両派の会談が行われた。そして、妥協点を探るはずのテオドール・ド・ベーズ対ロレーヌ枢機卿の会談（論争）はむしろ和解の望みがないことを示してしまった。

このボワシーにおける会談の頃からロレーヌ枢機卿とロピタルの間は冷えている。しかしロンサールは依然としてロピタルに代表される「穏健派」の枠内に止まっていた。このボワシーの会談では聖職者の規律の改革が問題になっており、修道院に属さない一時的な聖職録の所有者 *commendataire* であるロンサールにとっては脅威であった。しかしその会談の最中に、問題とされた聖職録のどれか一つをロピタルやトゥールノン枢機卿が自分へまわしてくれるのではないかと期待をロンサールは持っていたのである²⁸。

²⁴ 矢田部厚彦、「宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯」、p.123。

²⁵ 司法・警察および教会制度に関する改革案。矢田部厚彦、『宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯』、p.125。

²⁶ Lm11, XI. ただし出版は1562年のことである。

²⁷ Maurice Lange, *Quelques sources probables des Discours de Ronsard*, p.793, RHLF, 1913.

²⁸ Lm11, VIII. トゥールノン枢機卿はこの会談の議長だったが、実質はロレーヌ枢機卿が取り仕切った。

1562年1月3日、サン・ジェルマンにて貴顕会議が開かれる。この会議は新教の礼拝を禁止した7月勅令の改正を目的としていた。このころ、ロピタルは新旧両派の溝を埋めることは不可能と認識し、両者の共存をはかろうと考え始めていたらしい²⁹。そして1562年1月17日、一月王令が出される。プロテスタントに、城外での礼拝の自由を認め、城壁内においては私邸内に限って集会を持つことを許した。プロテスタントの司祭たちは正式に承認され、役人でもプロテスタントのミサに出席することを許された。しかしこれはカトリック側にとっては行き過ぎた譲歩であった。おそらくロンサールもそう感じていた³⁰。

1562年3月1日、ヴァッシーの虐殺（ギーズ公の軍勢が新教徒を虐殺）が起きる。これが発端となって第1次宗教戦争が始まった。1562年3月16日～25日にかけてフランソワ・ド・ギーズの一隊がパリにはいり、コンデ公の隊と市街戦を繰り広げる。カトリーヌ・ド・メディシスはまだギーズ派につくかロピタルの寛容政策を続けるか迷っていた³¹。さらに、フォンテーヌブローからカトリーヌ・ド・メディシスとシャルル9世がパリに連れ戻されて以来、ギーズ派に掌握されていた宮廷ではロピタルには発言力はなく、その寛容政策の影響力を行使する力はなかった³²。ロンサールはロピタルに何ら期待はできなくなり、むしろ場合によってはロピタルと深い付き合いがあることが不利に働く可能性すら出てきたのである。

宮廷でも新教色は急速に否定されていた。代わりに強硬・弾圧政策が台頭してきていた。1560年の段階では、「デ・ゾーテルへのエレジー」はギーズ擁護にまわった一方で、穏健派のロピタルにも気を遣う余裕があった。だが、もはやどちらか一方を選ばなければならない状況になっていた。寛容政策を推進していたロピタルが隠棲してしまい、宮廷でなんの力も発揮できない以上、ロンサールはロレーヌ枢機卿側へ、ギーズ側へ、対新教強硬派へと態度を切り替えなければならなかったのである。こうした状況にあって、ロンサールはギーズの側に組し、武力で新教徒に対抗することを訴える必要があった。

そして1562年3月、「デ・ゾーテルへのエレジー」が小冊子になって発行されている。内容の変更されたエレジーは、当初とは異なり、その内容と公表時期の両方の要因によって、明らかにギーズ擁護（対新教強硬派）の立場に立ったものになっていた³³。その内容がどのようなものかはずで見えてきた通りである。

さらに1562年5月、あるいは8－9月に、ロンサールが司祭聖職録を持っていた Évallé au

²⁹ 矢田部厚彦、「宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯」、p.147。

³⁰ Lm11, IX.

³¹ Lm11, XII-XIII; Charbonnier, *La poésie française et les guerres de religion*, p.41, note 3.

³² 矢田部厚彦、「宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯」、p.150-p.157。ロピタルは王室の不興を買い、最終的には隠棲を余儀なくされることとなった。

³³ Lm11, p.15, note 1, 《... Ronsard la fit réimprimer à part en 1562, très probablement au mois de mars, pour servir à la polémique et justifier le rôle des Guises non seulement à l'Amboise, mais à Vassy, ...》。

Maineの教会がユグノー達の武装グループによって略奪された。ロンサール自身も武器をもって戦わねばならない状況があったとされている。ユグノーによって死の危険を感じる状況に置かれたロンサールも憤慨していた³⁴。1562年5月頃に *Discours des miseres* が書かれているが、この *Discours* ではロンサールは2つの側面を見せている。ロンサールはまだロピタルと同じように妥協が可能だと考えていたが、穏健な態度も見せている一方で、ギーズ派寄りの強硬な態度も示している³⁵。「デ・ゾーテルへのエレジー」の内容を一変させて武力闘争肯定派に廻ったロンサールだが、1562年後半という時期にも、新教徒との知人と完全に切れていたわけではない³⁶。ただ、*Continuation de Discours, Remontrance* の2つの詩編の内容はいよいよ過激になり、1560年頃の穏健な態度とは大きく変わっている³⁷。ロンサールももはや「穏健」という優柔不断な態度を続けて行くことはできなかつたし、そのつもりもなかつたのである³⁸。

まとめ

本稿では、「デ・ゾーテルへのエレジー」について、先行研究をまとめ、その穏健な態度が「共生」と読めるかどうかを考察する研究の一部である。紙面の都合上、「デ・ゾーテルへのエレジー」について、1560年から1562年までを扱うにとどめた。1560年発表当時の穏健な内容のテキストから反新教色の強い1562年のテキストに至るまでを、作品の変化、ロンサールを取り巻く環境・事情の変化を中心にまとめている。

1560年のテキストには新教徒へ対する非暴力闘争というスタンスはあるものの、それを「共生」という考え方の反映と読めるかどうかはまだ判断を下してはいない。逆に1562年のテキストを念頭に置いて、ロンサールには「共生」という感覚はそもそも無いのだという判断もまだ下すべきではない。本稿では当時の社会背景とロンサールの個人的な利害という2つの観点を提示しているが、ロンサールは利害関係と社会情勢のみで動いていたわけではないのである。

1562年に入り、両派の対立はそれまでとは異なる局面を見せ始めた。4月15日、コンデ公はイングランド女王エリザベス一世の援助の見返りにカレーの譲渡を約束したのである。さらに9月

³⁴ Lm11, IX, *Remontrance au peuple de France*, v.545-684。この詩が書かれたのは1562年の年末であり、発表されたのは1563年なので注意が必要である。Charbonnierはこの教会略奪の話しを「デ・ゾーテルへのエレジー」の1562年のテキストの変化と結びつけている。さらに Lm11, p.92, note 1によれば、この事件は1562年5月、あるいは8-9月にかけての出来事とされている。

³⁵ Lm11, XIV.

³⁶ Charbonnier, *ibid*, p.49.

³⁷ *Continuation de Discours* は1562年10月~11月にかけて執筆されたと推定される。もう一つの詩編、*Remontrance* は1562年11月から12月ころの執筆である。Lm11, XV-XVII. Charbonnier, *La poésie française et les guerres de religion*, p.41, note3.

³⁸ Charbonnier, *ibid*, p.47.

³⁹ アントワヌ・ド・ブルボンはこのルーアン攻囲戦で死亡している。

にはハンプトン・コートの密約で、フランス新教派はエリザベスにル・アーヴル譲渡を約束した。これに対してカトリック軍はすぐさまルーアンを包囲し、10月には落城させている³⁹。外国との戦争に等しい状況によって、当初の宗教対立の様相はフランスという国、そしてその国を治める王権、母国、愛国心という問題と必然的に関係してくることになる。

ロンサールは1562年の段階では強硬姿勢を打ち出したが、ロンサールはやがて1560年ころの穏健な態度へと再び回帰して行く。「共生」という視点からロンサールの変化を読み解こうとすれば、回帰の問題に加えて、国家という問題をも含めて考える必要がある。まだ先があるのである。

使用テキスト

Œuvres Complètes de Pierre de Ronsard, éd. Laumonier, S. T. F. M., 1937–1990.

参考文献

1. P. de Ronsard, *Œuvres Complètes de P. de Ronsard*, éd. Blanchemain, Librairie Jannet, 1857.
2. Michel de L'Hospital, *Œuvres complètes*, précédées d'un essai sur sa vie et ses ouvrages par P. J. S. Dufey, Slatkine Reprints, 1968, édition princeps, 1824–26.
3. P. Laumonier, *Tableau chronologique des Œuvres de Ronsard*, deuxième édition, Burt Franklin, New York, 1969.
4. F. Charbonnier, *La poésie française et les guerres de religion*, Slatkine Reprints, 1970, édition princeps 1920.
5. Maurice Lange, *Quelques sources probables des Discours de Ronsard*, RHLF, 1913.
6. 矢田部厚彦、『宰相ミシェル・ド・ロピタルの生涯』、読売新聞社、1975.